

不幸と芸術

— ヘンリー・ジェームズの『『ベルトラフィオ』の作者』 —

(ベルトラフィオ／芸術／唯美主義)

中井 誠 一*

Misfortune and Art

— Henry James's "The Author of 'Beltraffio'" —

(Beltraffio/art/aestheticism)

Seiichi NAKAI*

1

『『ベルトラフィオ』の作者』は *English Illustrated Magazine* に1884年6月から7月にかけて連載され、85年に同名の表題の単行本として他の4篇の短篇を含めて出版された。110数篇に及ぶジェームズの短篇(ジェームズ自身は tale と呼んでいるが)はよく知られているように、幽霊もの、国際状況もの、芸術家もの、孤独ものという四つの大まかな分類がなされており、題名からも推測できる通り、この作品は芸術家の実生活や芸術と人生、社会との関わりを描いた「芸術家もの」に含まれる。この短篇は、数多いジェームズの短篇集の中で特に技法的に卓越した作品、あるいはテーマとして特殊な作品という訳ではないが、人生と芸術に対するジェームズの態度を典型的に示したものとしてしばしば論じられている。ただ、“The Figure in the Carpet”や“The Middle Years”といったより複雑なテーマを描いた短篇や作者自らの芸術観をもっと直截的に描いた名篇の陰に隠れているせいか、この作品だけを深く論じている研究者は余りないようである。その他にもこの短篇にはいくつかの瑕疵があると見られている。その最大のものが、母親が自分の最愛の息子を医者にもかけず病気で死ぬままにさせるのは、父親の芸術の毒気に冒されるのを恐れたためだという、その動機の不自然さである。ジェームズの作品の優れた読み手である中村真一郎はその著書『小説家ヘンリー・ジェームズ』のこの短篇について述べた件りで、物語中の家族の関係を次のように評している。

私は基本的に、彼の人生態度には、不毛性、独身者としての、現実に対する不能性があると、今

まで何度も指摘してきたが、この作品になって、それは単なる否定的な欠点、人間として足りない点、というのではなく、いわば積極的に何か不思議に非現実的で、空想的、また抽象的な架空の、厚い人生図を彼は作り上げており、その濃密な別世界のなかに彼は呼吸している、そしてそれを人生であると信じ、その秘密を解こうとしている、という奇怪な印象を持つのである。

それは、この物語のなかにおける、夫と妻との関係、母と息子との関係の、信じられない非現実性となって現れる。そして、作者はそのあり得ない人間関係を、深い現実として誠実に追求し、分析し、私たちにその秘密を伝えようとする。[下線著者]

ジェームズの人生観の非現実性の問題はおくとして、中村氏が、その肯定的な文脈とは裏腹に「あり得ない」という極めて否定的な言葉で表現している家族の関係は、表面的な筋を追う大方の読者にとっても首肯される評価だと思われる。

当時のイギリスの文壇は、写実主義から自然主義へと進展した大陸の文学潮流とは合流せず、19世紀前半のロマン主義を継承するラファエロ前派からウォルター・ペイター、オスカー・ワイルドへと繋がる唯美主義の全盛期で、この短篇の主人公であるマーク・アンビエントもそういった芸術至上主義の作家として設定されていると考えられている。そして彼の妻は、厳格なヴィクトリア朝の社会風土を体現した敬虔なキリスト教徒で、夫の小説を不道徳で汚らわしいものと見なしている道徳的人物として描かれている。

『創作ノート』によると、ジェームズはこの作品の題材を、友人であるエドモンド・ゴスから聞いた、唯美主義的な作家 J. A. シモンズ夫婦の不和からとって

* 英語教室 Department of English

いるという。

March 26th, 1884. Edmund Gosse was speaking of J.A.S., the writer (from whom, in Paris, the other day I got a letter), of his extreme and somewhat hysterical aestheticism, etc.: the sad conditions of his life, exiled to Davos by the state of his lungs, the illness of his daughter, etc. Then he said that, to crown his unhappiness, poor S.'s wife was in no sort of sympathy with what he wrote; disapproving of its tone, thinking his books immoral, pagan, hyperaesthetic, etc. 'I have never read any of John's works. I think them most *undesirable*.' It seemed to me *qu'il y avait là un drame — un drame intime*, the opposition between the narrow, cold, Calvinistic wife, a rigid moralist; and the husband, impregnated — even to morbidity — with the spirit of Italy, the love of beauty, of art, the aesthetic view of life, and aggravated, made extravagant and perverse, by the sense of his wife's disapproval.²

ここに見られるように、シモンズの「極端なややヒステリックな唯美主義」に対してその妻は共感しておらず、彼の書くものを「不道德で異教的で過度に唯美的」として、「私はジョンの作品を読んだことがありません。とても不快なものだと考えています」とさえ述べている。ジェイムズはそこから「偏狭で冷たいカルヴィン主義的な妻と病的なほどイタリア精神、美と芸術に浸り人生を唯美的に見る夫」との間の対立のドラマを見だし、夫婦間の大きな対立点として子供の教育を絡ませることを思いついたのである。実際シモンズ夫婦の話の概要はほぼそっくりそのまま物語の枠組みとして使われているとあってよいであろう。レオン・エデルによると、シモンズ夫妻の不仲の本当の理由は夫の同性愛のためであったのだが、ジェイムズはそれを知らなかったにも拘らず、美しい息子ドルチノの魂と肉体の所有という微妙な状況設定の中で、そのことを暗示させているという。³ こうした作品の背景の共通項とそれに順当に従った筋立のため、ともすれば批評家ですら、耽美的な芸術家と道徳的な妻との間の葛藤とそこから引き起こされる悲劇というテーマでしか作品評価をしなくなってしまう。

しかし、登場人物の言動を詳細に検討すると、実は語り手の伝える「事実」と「解釈」との間に微妙な齟

齟が見られ、それが評価の決定的な転換を生み出していると考えられるのである。実はジェイムズの意図は、今まで解釈されてきたような葛藤と悲劇のテーマだけにはとどまらないのである。

2

物語は、シモンズをモデルとしたとされるマーク・アンビエントを熱狂的に崇拝するアメリカの青年「わたし」が、その作家に会うためにサレーにある彼の別荘へやってくるところから始まる。語り手はこの出来事から数年経った後の、その青年自身である。ジェイムズの一人称視点の物語の特質についてはもはや触れるまでもないが、この作品でも語り手の、特に人生経験の浅い若者としての語り手の視点の限界に留意する必要がある。アンビエントに対する敬愛と自宅に招かれた興奮とで彼の観察眼が歪んでいないという保証はないからだ。しかもここでは、語り手は若い頃の自分の様子を語るという二重の視点構造となっている。一人称視点の物語を解釈する際には、語り手が信頼できるかどうかの検証が必要であるが、ジェイムズにおいてこれは特に重要で、検証の軽視のためにしばしば作品全体の解釈が歪んでくることがありうるのである。

青年は「ベルトラフィオ」の作者であるこの天才作家の別荘にしばらく滞在することになるのだが、作家に対する熱中ぶりは相当なもので、あらゆる場面で賞賛をあらわにしている。たとえば、敬愛するこの作家が駅までわざわざ迎えに来てくれた時に、「わたし」はその有頂天ぶりをこのよう伝えている。

I remember thinking it a piece of extraordinary affability that he should give directions about the conveyance of my bag; I remember feeling altogether very happy and rosy, in fact quite transported, when he laid his hand on my shoulder as we came out of the station.

I surveyed him, askance, as we walked together; I had already, I had indeed instantly, seen him as all delightful. (6 – 7)⁴

この高揚した気分のまま若者は作家の別荘に到着する。そして彼の家にも「天才」を見だし、絨毯やカーテンにさえ「想像力」を感じ、蔦の絡まる古い褐色の壁が「ラファエロ前派の作品の傑作から写したもの」のように思えるのである。しかし、こうした度が過ぎると言ってもよいほどの賛辞ではあるが、後のアンビエ

ント夫人の「ちょっとした居心地のよい家ですけど、こんなところならいくらでもありますわ。」というそっけない言葉が語っているように、彼にとっての天才の家もイギリスの田舎の別荘としてはさほど特徴のあるものではなかったようである。そして青年自身の“*That was the way many things struck me at that time, in England — as reproductions of something that existed primarily in art or literature.*”⁽⁸⁾ という叙述が暗に示すように、当時の、歴史の浅い文化的後進国アメリカからやってきた芸術家肌の若者にとっては、イギリスの風物がほとんど絵画的、芸術的色彩に彩られているように見えたであろうことは想像に難くない。これはまた作者ジェームズ自らが青年期にイギリスあるいはヨーロッパ諸国を訪れたときの感慨の反映でもあると言えよう。

確かにこの若者は、アンビエント夫人との最初の会話の中ですでに、夫婦間の不和の微かな雰囲気を感じたり、作家の妹の本質を直ちに見て取ったりと、通常以上の識見を備えてはいるが、上述の例からも分かる通り、深い洞察力と豊かな想像力を持った信頼に足る語り手とはとても言えないであろう。この作品でも、現実起こった出来事と語り手や他の登場人物の判断や解釈との整合性を慎重に検討すべきことが、ここで再認識されるのである。

この青年の恍惚状態は、アンビエントから、読んで感想を聞かせてくれるようにと新しい作品の校正刷りを渡されるときに頂点を迎える。興奮したまま彼は、作家の妻ベアトリスにその喜びを告げるのだが、“*I don't take that sort of interest in my husband's proof-sheets. I consider his writings most objectionable!*”⁽³⁶⁾ という厳しい返事を受け、彼女が夫の作品をまったく評価していないことを直截に知らされる。アンビエントのような作風を嫌う勢力が存在し、新聞批評では批判を受けていることも知ってはいたが、その妻がこれほどまでに夫の作品を嫌悪していることが、青年にはどうしても納得いかない。その後彼女に向かって夫の才能を誉め上げ、一度校正刷りを読んでみるように勧めさえするのである。

確かに、ベアトリスの拒否の言葉以降、青年の度過ぎた熱狂もいくぶんは覚めているようには思えるが、物語全体を覆う、作家に対する崇拜の視点から、我々はともすればジェームズの評価を若者のそれと重ねてしまいがちである。しかし、ジェームズ自身は芸術至上主義、あるいはそれを支持する作家ではないことは言うまでもない。なるほど、たとえば、中村真一郎は「この短篇はそれ以前の模範的な、『小説とはかくある

べし』という観念に従って書いた代表的長篇などに比べて、はるかに作者の無意識界に眠る、本音の人生観や美意識を反映している」と評し、「ここに提出されている理想的文学者像、その文学者の作る作品、その作品の拠る美学は、従来、ヘンリー・ジェームズが信奉しているように見せていた、フランス自然主義流の客観的写実主義小説ではなく、極端に唯美的な、そして学匠的に文体に凝った作品、ラファエル前派の人々や、就中、ウォルター・ペイターなどの仕事を連想させるものである。」と述べて、ジェームズの唯美的傾向を示唆している。⁵ また、マックスウェル・ガイスマーも *Henry James and his Cult* の中で、

Mark Ambient himself, this rich, cultivated, elegant literary figure, who is defending above all the freedom of the artist against the stupidity and prejudice of the typical Anglo-American reader (as personified in the evil wife), and whose “paganism” is expounded against the background of “ *dusky, delicate bindings of valuable books,*” was also in part a projection — a dramatization — of the younger James's own literary aspirations.⁶

とアンビエントとの近似性を述べており、この作品におけるジェームズ自身の唯美主義への傾倒は一見明らかであるようにも思える。

確かに、前述したように、芸術的不毛の地と考えた当時のアメリカから渡欧した若きジェームズにとって、旧世界の美と芸術、そしてそれらと実生活の葛藤はヨーロッパの作家たちにとって以上に痛切に感じられるものだったのであろうし、それ故に人生観においても作品とテーマとしても大きな魅力となるものだったのであろう。しかし、ジェームズは、芸術家の生活と芸術的生活を峻別する作家であった。だからこそ、短篇「未来のマドンナ」で、芸術を追い求める生活の中で挫折する画家を描いているように、芸術それ自体の持つ危険性にも敏感であったのである。ジェームズの芸術観は人生そのものを芸術化するような芸術至上主義とは明らかに一線を画しているといえるであろう。それは、世紀末芸術至上主義の雄であるワイルドがいわゆる「ワイルド事件」で投獄されたことについて、エドモンド・ゴスに宛てた1895年4月8日付けの手紙にある“*He was never in the smallest degree interesting to me...*”⁷ という冷淡な感想をみてもジェームズのスタンスは推察されるのである。

しかし、それにも拘らず、ガイスマーが述べるように、マーク・アンビエントの中にジェイムズの投影を見ることは可能である。というより、意識的にそういう要素を含ませているように思えるのだ。ジェイムズは、この短篇と同じ年の1884年に書かれた有名な文学批評 *The Art of Fiction* の中で次のような叙述を残している。

A novel is in its broadest definition a personal, a direct impression of life: that, to begin with, constitutes its value, which is greater or less according to the intensity of the impression. But there will be no intensity at all, and therefore no value, unless there is freedom to feel and say.⁸ [下線筆者]

この部分はまさにこの評論の中心的テーマであり、全編を通じ、自由な想像力を駆使して「人生の直接的印象」を生み出すことこそが小説の目標であると、ジェイムズは主張している。

ところが、アンビエントが青年と庭を散歩しながら、自らの芸術観や新作の進行具合を語るとき、彼はこの評論とほとんど同じ表現使っているのである。

“I want to be truer than I’ve ever been,” he said, settling himself on his back with his hands clasped behind his head; “I want to give the impression of life itself. No, you may say what you will. I’ve always arranged things too much, always smoothed them down and rounded them off and tucked them in — done everything to them that life doesn’t do. I’ve been a slave to the old superstitions.”

“You a slave, my dear Mark Ambient? You’ve the freest imagination of our day!”
(42) [下線筆者]

まるで *The Art of Fiction* のエッセンスを抽出して、小説の一部分に注入したかのような一節である。評論の中のジェイムズも、この物語の登場人物であるアンビエントも、ともに文学の使命を「人生それ自体の印象」を作り上げることだと考えているのである。

ここで再検すべき一つの問題は、では一体マーク・アンビエントは真の意味での芸術至上主義者なのだろうかということである。確かに彼の書くものが唯美的な作品であることは、「わたし」の視点からだけでな

く、世間との軋轢、カルヴィニスティックな妻の反応など様々な面から確信できる。しかし、創作ノート中のシモンズを形容した「極端なややヒステリックな唯美主義者」というイメージからはアンビエントは遠いように思われる。実際、彼が人生のすべてを美的観点から見ることを明示するような場面はほとんど見られないのである。そういった印象はすべて語り手である青年の視点からの描写に拠っている。たとえば彼は、アンビエントの芸術論を聞いた後、次のように言う。

I shall not attempt to repeat everyting that passed between us, nor to explain just how it was that, every moment I spent in his company, Mark Ambient revealed to me more and more the consistency of his creative spirit, the spirit in him that felt all life as plastic material. (44)

語り手は、アンビエントが「人生すべてを加工の素材として見る」という印象を強く読者に与えながらも、その認識に至った詳細について決して明らかにしない。こうして見てくると、この作家を極端な芸術至上主義の権化のように見なす根拠はほとんど、語り手である「わたし」からもたらされたものであることが察せられるのである。“Firm and bright . . . the devilish thing has a way, sometimes of being bright . . . without being firm.” (43) という言葉に典型的に示されているように、アンビエントは、自らの芸術に美だけでなく堅固さをも求める穩健な唯美主義者というのがより客観的な評価であろう。そしてジェイムズは、アンビエントの中に「人生を描き上げよう」とする自らの小説観を反映させているのである。

むしろ先端的な芸術至上主義者として、いやそのパロディとして描かれているのは、アンビエントの妹のほうである。彼女は最初から、髪に金色のリボンや鎖を飾り、ピロードの長衣を着て、まるで「ロセッティの絵」のような装いをし、唯美的時代精神を具現化したような姿で現れる。兄のように作家としての才能は持っておらず、人生を芸術的に見せようとして生きているように見える。しかし彼女にしても、兄の文学のような「形式」に敏感であるが時に「身を引く」ことがある、と告白しているように、人生観自体はさほど極端でもない。アンビエント嬢についての一連の印象も、彼女に“sort of grudge” (24) を抱いている語り手の冷笑的な過度の反応に過ぎないように思えるのである。

このような状況の中、ジェイムズの設定した唯美主義的な作家とその作風を嫌悪する道徳的な妻とのドラマは、息子の死という悲劇的結末でクライマックスを迎えることになる。今までの定説通りの解釈であれば、そして創作ノートの当初の構想通りであれば、余りにも道徳的宗教的な母親も、青年の勧めでようやく夫の最新作の校正刷りを読むが、その不道徳さに絶望し、夫の影響が息子に及ぶ前に彼を熱病で死ぬままにさせる、という筋書きになる。しかし、もしその通りに見るのならば、1章でも述べたように、結末の不自然さはどうしても否めない。しかも、最愛の息子を失ったアンビエントの妻が、息子の死の真因であるはずの夫とその芸術を憎悪するどころか、夫の作品を——あの「ベルトラフィオ」でさえも——すべて読んでしまうというエピローグや、アンビエントの作品を具現化したような彼の妹が修道院に入ってしまうという事実をどう解釈すればよいのだろうか。表面的なテーマだけを追っていけば、アンビエント夫人の恐ろしい行為も夫の作品への耽溺も妹の入信も、S. G. プットが“The bare story is incredible.”⁹と行うように、まったく説得力を欠いた実体のないものになってしまう。しかし、この結末部を視点という立場から見直してみると、この成りゆきはまったく違ったものとなり、作品のテーマ自体が逆転してしまうことになるのである。これを、詳しく検証してみよう。

3

ドルチノの死の前後における登場人物の言動を子細に考察すると、そこには明らかに語り手の語る「事実」と登場人物および当人の「解釈」の間にずれが見られる。そしてその径庭を広げているのはアンビエント嬢なのである。ベアトリスが息子を見殺しにしたという定説を作り上げた決定的な評価は、実は彼女の言葉だけに拠っている。それに関する一切の弁明をベアトリス本人からも作家の口からも聞かされていないことにここで注意する必要がある。ドルチノの容体が急変したとき、急いで兄を医者のもとへ送り出した妹は、青年に向かって唐突に言う。

“It's too late to save him. His mother has let him die! I tell you that, because you're sympathetic, because you've imagination,” Miss Ambient was good enough to add, interrupting my expression of horror. “That's why you had the idea of making her read Mark's new book!” (70)

彼女の表現は、まるで青年が、夫人に校正刷りを読ませることで、ドルチノの死に加担しているかのようなニュアンスを含ませている。前述した、彼女に対する「わたし」の「恨み」もここから来ていると考えられるし、延いてはこの罪悪感が彼の判断を阻害する役割も果たしているのである。その上で彼女は事実と勝手な推測を織りませながら、不道徳な作品を読んだ後に子供を犠牲に捧げる決心をした恐ろしい母親というイメージを、ベアトリスの上に作り上げていく。夫人が子供に薬をやらなかったとか、医者への指示に従わなかったという彼女の言葉は実は事実の裏づけがまったくないのである。なぜなら、夫人が「錠を下ろして閉じ込めてしまった」という作家の言葉から分かるように、アンビエント嬢は夜中の2時以降今まで夫人の部屋には行っていないからである。信じられない思いの青年に対し、彼女は“You think it necessary to protest — but you're relly quite ready to believe me. You've received an impression of my sister-in-law — you've guessed of what she's capable.” (72)と自分の言うことを信じるように促すのである。青年はこの出来事から6ヶ月後にしか夫人に会うことがなかったので、真相を確かめようもなかったし、自らの罪悪感のせいもあって、作家にこのことは話さないという密約すらアンビエント嬢との間で交わしてしまう。こうして、事実上アンビエント夫人を恐るべき母親と断定するような何らの根拠もないことが認識される。彼女はむしろ、頑なではあるが、息子を愛し救おうとして果たせなかった哀れな母親にすぎない。しかし、アンビエント嬢の「証言」と青年の語りをもそのままに「信じる」読者は、彼女を過酷な母親と見なしてしまうのである。

こうして考察してくると、当然ながらこの短篇自体の評価が変わってくる。テーマは、唯美主義的な作家と道徳的な妻との葛藤と、結果としての悲劇という従来枠組みを超えて行く。まだ読んだこともなかった夫の作品を偏狭な固定観念から否定していた妻が、息子の病床でその一部を読み、初めて真の芸術の一端に触れる。そして、最愛の息子の死という不幸を通じてさらに深く、文学の世界へ目を開かれていく。そういう新たな地平がそこから見えてくるのである。このような観点から、物語の結末を見直すと、ドルチノの死後健康を害したアンビエント夫人が、息子の後を追うように病死する数週間前まで夫の作品を、「嫌悪すべき」ベルトラフィオまでも読んでいたという逸話も納得のいくものになるであろうし、アンビエント嬢についても、夫人についてのイメージの捏造に良心の呵責を感

じ、修道院に入ってしまうという解釈が比較的自然に導き出されるであろう。

創作ノートにおいても、ジェイムズ自身当初の構想を「あまりに不自然な悲劇的結末」“the catastrophe too unnatural”¹⁰と述べている。そういう明確な意識があったにも拘らず、ジェイムズが一切の変更もなくそのままの形で、肉づけだけをして物語を作ったと考えることこそむしろ「不自然」である。彼はこの「対立のドラマ」から、息子の死という不幸と、憎むべき思想の現われであったはずの夫の作品を読むという行為が示す芸術の受容を通じて、「融和の物語」へと構想を発展させていったのである。そしてそれを未経験な若者に目撃させ、多少の経験を積んだその後の彼に、罪悪感を抱きつつその経験を語らせるという複雑な手法で、作品に多層的な奥行きを与えていると同時に、「真実」を見通すことの困難という「人生それ自体の印象」を読者に提示しているのである。

注

- 1 中村真一郎『小説家ヘンリー・ジェイムズ』（集英社、1991）127.
- 2 Leon Edel, ed., *The Complete Notebook of Henry James* (Oxford University Press, 1987) 25.
- 3 Leon Edel, *A Life: Henry James* (Harper and Row, Publishers, 1985) 313.
- 4 Henry James, “The Author of ‘Beltraffio’” in *The Novels and Tales of Henry James* vol. XVI (Charles Scribner’s Sons, 1937) この論文の引用はすべてここから引いたものである。以下括弧内に頁数を記す。
- 5 中村真一郎、125.
- 6 Maxwell Geismar, *Henry James and his Cult* (Chatto & Windus, 1964) 59.
- 7 Leon Edel, ed. *Henry James: Letters* vol.2 (The Belknap Press, 1984) 10
- 8 Henry James, *The Art of Fiction* in *Henry James: Literary Criticism* ed. by Leon Edel (The Library of America, 1984) 55.
- 9 S. G. Putt, *Henry James: A Reader’s Guide* (Cornell University Press, 1966) 216.
- 10 *Notebook*, 26.